

## ■ 中間考査に向けて

5月27日(月)から5月30日(木)まで、1学期中間考査が実施されます。3年生にとっては、進路決定につながる大事な考査になります。しっかりと準備をして臨みましょう。1年生にとっては高校入学後初めての定期考査になります。

1年生は入学したばかりでまだ分からないと思いますが、推薦で大学等への進学を希望する場合には、評定平均値が大事な要素になります。今から少しずつ積み重ね、3年生になってから後悔しないようにしましょう。当然のことながら、2年生のみなさんもしっかりと学習に取り組んで臨むようにしましょう。基礎学力の定着を図ることが希望進路に結びつけていくうえで非常に大切になりますので、自覚的に学習に取り組むようにしてください。例年、3年生から、「1年生のときから、しっかりと考査前に学習しておけば良かった」という声が聞かれます。後悔しなくて済むように、計画的に学習を進めていくことが大切です。みなさんのがんばりに期待します。



## ■ 3年生の進路アンケート結果

下の表は、4月に実施した3年生の進路アンケートの結果をまとめたものです。3年生165名のうち、162名から回答がありました。アンケート回答時点で、大学進学か専門学校進学か、進学か就職か・・・などで悩んでいると思われる複数の回答があったものについては、全体的な記載内容から判断したものもありますし、特に同等と思われる場合には、大学と専門学校であれば大学を、進学か就職かであれば進学を第1希望で考えているものとして集計してあります。当然ですが、最終的な希望進路、進路決定先が現時点での希望と異なっても構いません。少しでも希望する進学や就職ができるよう、学校としてもサポートしていきますので、みなさんも早くから対策をしていくよう心掛けてください。分からないことなどがあれば、そのままにせず、どんなことでも良いので担任の先生なり、進路指導部の先生に早めに相談しましょう。 ※ ( ) は女子の人数



| 現時点でのあなたの進路希望は？         | 希望者数     |
|-------------------------|----------|
| 4年制大学進学(東日本国際大学進学希望を含む) | 96名(22名) |
| 短期大学進学(いわき短期大学進学希望を含む)  | 7名(7名)   |
| 専門学校進学                  | 36名(19名) |
| 就職                      | 19名(5名)  |
| その他                     | 4名(3名)   |

## ■高3進路ガイダンス、奨学金説明会

5月21日（火）の1校時に高校3年生の全員を対象に進路ガイダンスを開催します。今後の流れを話しますので、よく聞いて、提出書類が遅れたり、間違えたりしないようにしましょう。今年度から、『進路活動のてびき』については、BLENDで配信するようにしますので、しっかり活用してください。なお、就職希望者については、6月下旬に就職希望者向けのガイダンスを行います。求人票の見方、職場見学などについて説明する予定です。進学か就職かで迷っている生徒は、就職ガイダンスにも参加するようにしてください。

5月23日（木）の昼休み（12時50分～）には、日本学生支援機構の予約採用の説明会を開催します。利用を考えている生徒は参加するようにしましょう。利用するかどうかわからない場合には必ず参加してください。仮に申し込み、結果通知が届いたとしても、合格した大学・短大・専門学校の入學手続きの際に、



最終申込みをしなければ、申込んだことにはなりません。申込期間は6月と7月になります。詳細は追って連絡しますので、予覚確認して手続きを行ってください。5月23日（木）に何らかの理由で参加できなかった生徒に対しては、日を改めて説明する機会を設けたいと思います。個別に説明を聞きに来る生徒もいたりすることもあります。担当教員2名はいずれも多忙であるため、できるだけ、説明の機会は絞りたいと考えています。忘れずに参加してください。

## ■卒業生の合格体験記

昨年度卒業生の合格体験記です。今回は東洋大学に進学した馬場大志さんと医療創生大学に進学した馬上裕子さんです。ぜひ参考にして、希望進路実現に結びつけてください。

【合格体験記】 馬場大志さん（昨年度3年4組）  
東洋大学文学部東洋思想文化学科（学校推薦型公募制）

私は、東洋大学文学部東洋思想文化学科に公募制推薦で受験しました。この大学を選んだ理由は、アジアの宗教や文化、思想に興味を持っていたからです。私は高校1年生の頃から、ある石仏について調査していました。そのおかげで面接の際には調査を通して分かったこと、考えたことについて述べたところ、大学の先生方が興味を持ってくださり、そのことについて、深く聞かれました。

（裏面に続きます）

小論文については、事前にたくさんの過去問をやるべきだったと感じています。1つのテーマについて納得いくまで練習するのに時間がかかってしまい、数題のテーマについてしか準備できませんでした。しかし、日本史の先生に放課後、お時間をいただき、出題されそうな内容についてたくさん話をしていただいたおかげで、知識を活かし、本番では余裕をもって仕上げることができました。



私がこの受験を通して感じたことは、自分の強みをしっかりと伸ばすことの重要性です。弱点を克服することはある程度大切ですが、部活動や探究活動などで成績をあげたり、自分の好きなこと、興味があることを人に示したりすることができれば、受験で大きく合否が変わってくると思います。私は小さい頃から卓球中心の生活であまり勉強が好きではなかったのですが、自分が興味を持ったことを深く研究した結果、今回の合格につながったと思っています。ただし、自分一人の力ではなく、たくさんの方のサポートのおかげで合格をつかみ取ることができました。

最後に、私は文武両道を目指して高校生活を送ってきました。部活だけ、勉強だけというふうには偏らないように心がけたことで、受験の際に面接で活きたように感じました。後輩の皆さんで、受験を目指す人は、精一杯頑張ってください。応援しています。

**【合格体験記】 馬上裕子さん（昨年度3年1組）**

医療創生大学看護学部看護学科（学校推薦型指定校制）

私は医療創生大学の看護学部看護学科に合格しました。私は中学2年生の時に両膝蓋軟骨軟化症で手術をしました。手術後、「このまま歩けなくなったらどうしよう」とか「前みたいに動けなくなったらどうしよう」などといった不安から毎晩泣いていました。その時に笑顔で優しく話を聞いてくれた看護師さんに救われたのがきっかけで、私も誰かを救えるような看護師になりたいと考えるようになりました。私が高校で福祉コースに入ったのも、ある程度資格を取得して看護に活かしていきたいと思ったからです。



高校3年の春に医療創生大学のオープンキャンパスに参加しました。模擬授業で病気による呼吸の音、高齢者疑似体験をした際に設備が充実しているところに惹かれ受験しました。オープンキャンパスに実際に行ってみることで、分からないことがたくさんあることに気づきました。自分の人生に関わる大事なことなので、ぜひ自分と向き合って、積極的に参加し、志望校決定に結び付けていってください。自分の意思できちんと志望校を決めてほしいと思います。

## ■ 女性初の弁護士・裁判長 三淵嘉子さんの話

4月から始まったNHKの連続テレビ小説（朝ドラ）『虎に翼』。伊藤沙莉さんが演じるヒロインの猪爪寅子は日本初の女性弁護士となり、その後、やはり女性として初めて新潟家庭裁判所長などを務めた三淵嘉子（みぶち・よしこ）さんがモデルになっています。

三淵さんは、台湾銀行に勤務していた父・武藤貞雄と母・ノブの長女としてシンガポールで生まれました。日本に帰国した後は東京で育ち、東京女子高等師範学校附属高等女学校を卒業後は父親の影響を受け、法律を学ぶことを決意。当時国内で唯一女性に法学の門戸を開いていた明治大学専門部女子部（後の明治大学短期大学。2007年に募集を停止し幕を下ろしました。※イラストは明治大学旧記念館）の法科に進みました。三淵さんは女子部を卒業した後、明治大学法学部に進学し、1938年に高等文官の司法科試験（現在の司法試験。※司法試験とは、裁判官、検察官、弁護士になるために必要な学識などを備えているかどうかを判定する国家試験のこと）に合格。明大卒業後は第二東京弁護士会に登録し日本初の女性弁護士となりました。明治大学同窓の中田正子さんと久米愛さんも同時に日本初の女性弁護士となりました。いち早く女性に法学の門戸を開いた明治大学から同時に3名の女性弁護士が輩出しています。この3名は女性法曹の先駆者となりました。



念願の弁護士になり、順風満帆だった三淵さんですが、戦争が幸せな生活に影を落としました。1939年、ヨーロッパを中心に第二次世界大戦が勃発すると、軍国主義を突き進んでいた日本も1941年に参戦。すると、国内には「戦争下で国民が私的な争いをすると何事か」という風潮が強まり、訴訟、中でも民事事件は激減していったようです。こうした状況下で、三淵さんは夫（※最初の結婚相手の和田芳夫。1946年に病死）との間に男児を出産し、育児に追われる中、弁護士業は「開店休業」状態になりました。

残された家族と生きていくために自分ができることは何かを考え抜いた末に三淵さんがたどり着いた答えは「弁護士ではなく裁判官になること」でした。「男女平等」を明記した現在の日本国憲法が公布済みで、「ならば、女性でも裁判官になれるはずだ」と三淵さんは一人で司法省に乗り込み、裁判官採用願を人事課に提出しました。すぐに裁判官にはなれませんでしたでしたが、後に採用されることになりました。

1972年、三淵さんは新潟家庭裁判所長に任命されました。女性初の裁判所長です。三淵さんは少年院送りになった少年に対して、親身に携わり、時には涙させる説諭も行ったそうです。三淵さんの審判に対して少年が不服を申し立てる「抗告」を受け付けたことはほぼなかったとのこと。

現代社会においても、女性法曹の割合はまだ多くはありません。第二次世界大戦前の日本とあれば、なおさら厳しい時代だったに違いありませんが、三淵さんは持ち前の明るさ、バイタリティーで新しい時代を切り拓いていきました。そのことも念頭に置いて、朝ドラを視聴すると、また一味違う見方ができるかもしれません。

※参考文献『三淵嘉子の人生』（メディアソフト）

文責：清水聖（進路指導主事）